

第 17 回日本在宅医学会大会 シンポジスト 抄録集・ホームページ掲載用原稿

シンポジウムテーマ		在宅死の現状について			
開催日	2015 年 4 月 25 日(土)	時間	17:00-19:00	収容人数	500 名
講師情報	ふりがな	姓	しょうじ	名	てるあき
	ご芳名		荘司		輝昭
	ご所属	医療法人社団在和会 立川在宅ケアクリニック			
	部署		役職		

演題名(80 字以内)

当院における在宅看取りと周辺訪問地域の在宅死の現状の諸問題について

ご略歴(300 字以内)

平成 3 年 杏林大学医学部卒業 第 2 外科入局
 平成 9 年 杏林大学大学院医学研究科 卒業
 共立蒲原総合病院外科医長、織本病院副院長、島村記念病院院長をへて
 平成 24 年 立川在宅ケアクリニック
 平成 9 年 東京都監察医(非常勤)
 平成 16 年 警視庁嘱託医
 資格
 外科専門医、解剖資格認定医(法医学)、死体検案認定医、日本医師会認定産業医ほか

講演概要(1000 字以内)

目的

当院は東京都多摩地域の在宅専門診療所として平成 23 年は 179 名(癌 158 名,非癌 21 名、在宅看取り率 81.8%)、平成 24 年は 191 名(癌 176 名,非癌 25 名、同 79.3%) の在宅の看取りを行った。

医療統計の「在宅死」は在宅の看取りと、いわゆる「異常死」として所轄警察の検視対象となった自宅死亡事例なども多く含まれている。

演者は在宅医療を行う傍ら、東京都監察医と警視庁嘱託医として異常死の検案業務も行っているため、多数の問題ある「在宅死」を経験してきた。今回は「在宅死」の現状と諸問題を調査、検討することで今後迎える超高齢化(多死化)時代に予測される問題の解決・対策に役立てるため、何を提言できるのかを考察した。

方法

平成 23~24 年の多摩地区の当院訪問地域を抜粋した。市町村別保健所発表の「在宅死」および管轄警察での自宅死亡の「異常死」の取り扱い書類から自・他殺、事故死などの外因死を除き、個々の事例について死因、発見状況、既往・受診歴、家族構成など多角的に統計処理を行った。また、搬送先病院で死亡確認されて「異常死」として取り扱われた事例についても同様に検討した。

結果

当院訪問地域の「在宅死」のうち約 30~60%が「異常死」として扱われていた。その中には、自宅において平穏に最後の時を迎えられる事例(癌死、老衰など)が約 20%存在した。また、病院搬送となった事例でも約 20%が同様であった。事例の中には在宅医療を受けていた事例も認められた。具体的な事例に関しては発表時に提示する。

考察

今後超高齢化(多死化)時代を迎えるに当たり、最期の時を自宅で迎えることが増えることが予測され、現状でも在宅死の比率が上昇しつつある。しかし今回の調査からは、問題ある「在宅死」が少なからずあることが浮き彫りにされた。地方では地域医療連携によって在宅での看取り率は向上されつつあるといわれているが、東京多摩地域においてはこれらの結果だけを見ると、在宅における地域連携がまだまだ未熟なものであると考える。しかしながら、一部地域では病診連携の屈強な構築により飛躍的に在宅での看取り率が上

昇していることも事実であり、今後この連携をどう広げるかを考える必要がある。

今回我々は、当院においての在宅の看取りと周辺訪問地域の「在宅死」の現状の諸問題について、様々な角度から検討した結果、見えてきた問題を報告する。